

梅岩教学と仏教

高 神 信 也

梅岩教学とは、石田梅岩（一六八五—一七四四）の学問をいう。

梅岩の言葉によると「我が教ゆる所は、商人の商人の道あることを教ゆるなり」といつているように、梅岩教学こそ、彼の深い思索と商人としての日常体験を基盤として成立した「町人の哲学」ともいふべきもので、一般に彼をして「石門心学」の祖としている。上河洪水（一七四八—一八一七）は『心学承伝之図』で先師梅岩について、次のように紹介している。

「……及レ長居于京都、学本于程朱、從于雲、而発性理之蘊奥、旦通于神釈老之書、下惟境街教授生徒、教要識時、以知心爲急務、從遊之士日衆、所著有都鄙問答、齊家論、既行于世、延享甲子秋九月廿四日、病終于家、享年六十……」（傍点筆者）

いつたい、彼の思想的發展過程をみると、まづ神道にはじまり、原始儒教を経て、朱子学に進み、最後に仏教に到達したとされ、「先生三十五六歳の頃まで、性を知れりと定めゐたまひしに、何となく其の性に疑ひおこり、是を正さずとて、かなたこなたと師を求めたまへども、何方にても師とすべき人なしとて、年月を磨ひしに……」ふとした縁で黄檗禅を修め、儒仏老の蘊奥を極めたといわれた雲全覚居士に出会い、師事すること数年、禅的修行の結果開悟したとされる。梅岩の思想は、基本的には朱子学を縦糸とし、神仏

老莊の学を横糸としたいわば折衷的思想ともいふべきもので、主著『都鄙問答』の中には、

「儒仏道トモニ勸善懲惡ノ教ハシレタルコトナレバ、相替ルコトモナカルベシ」、「神儒仏トモニ悟ル心ハ一ツナリ。何レノ法ニテ得ルトモ、我が心ヲ得ルナリ」、「仏老莊ノ教ヘモ、イハバ心ヲ磨ク磨種ナレバ、舍ツベキニモアラズ」、「仏法ヲ信仰スルハ、儒道ヲ以テ得タル心ト、心ニ二品ノ替リアラシヤ」、「儒道・仏道・老子、莊子ニ至ルマデ、尽ク此ノ国ノ相トスルヤウニ用ユルコト思フベシ、日本宗廟、天照皇太神宮ヲ宗源ト貴ビ奉リ、皇太神宮御宝勅ニ任セ、万ツクダ／＼シキヲ私ヒ捨テ、一心ノ定マレル法ヲ尋ネテ、天ノ神ノ命ニ合フ。唯一ヲ相クルニ、儒仏ノ法ヲ執リ用ユベシ。ココヲ以テ法ヲ吞マズ、一法ニ泥マズ、天地ニ逆ラハザルヲ要ス。」

などいたるところかゝる傾向がみられ、また彼の日常生活においても朝夕「……天照皇太神宮を拝し、大聖文宣王を拝し……弥陀釈迦仏を拝し……」といわれるように、信仰的にも極めて習合的でもあった。『都鄙問答』に引用されている仏典は、柴田実教授によれば、『法華経』『華嚴経』『涅槃経』『維摩経』『無量寿経』『観無量寿経』『無量無辺経』『随願往生経』『毘婆娑論』『大原問答』『一枚起請文』『景德伝燈録』『釈氏通鑑』『四部録坐禅儀』『般若燈論』『無門関』『臨濟録』『西方要訣』『三藏法教』『名義集』『釈氏鑑録』『往生要集』『六祖檀經』『観心略要集』『聖德太子明眼論』『遊行上人歌』『円光大師語、歌』『靈雲志勤禅师語』『世尊見生悟道語』『仏土章』『円覚大師語』

など、実に三二種の多きを数えるが、彼の経歴からみて必ずしも

仏教を組織的に研究したとは思われないが、書入れなどからみて、かなり適格にその内容を把握していたことは想像に難くない。

ところで、当代仏教諸宗中最も深く民衆に浸透していたと思われるのは、禪宗、浄土宗、浄土真宗の三宗で、禪の修行によつて開悟したといわれる梅岩は、この念仏宗でとく「浄土」「往生」「念仏」について、次の様に彼独自の解釈をしている。

元来念仏宗では、西方極樂に往生し、彼国に至つて如来の説法を聞いて悟を開き、成仏する教とされているが、彼によると、仏語に「迷ガ故ニ三界城、悟ガ故ニ十方空、本来無東西、何処有ニ南北矣」とあるが、このように考えると「彼国ト云ハ唯心ノ浄土ト云コト決定セリ」といふ、所詮極樂浄土は、我が心のうちに存在するものであり、さらに「随願往生經」を引用し、西方極樂とは「一切衆生ニ心ノ濁乱ル、者多ク、正念ノ者ハ少キユヘニ、衆生ノ心ヲ一筋ニ向ハシメン為ニ、西方極樂ト指テ教エ」たもので、極樂を西方にあると教えたのは、実は愚な者でも分かるように云つてゐるのに過ぎないとし、また、「往生」についても「扱如来ノ説法ト云ハ、直ニ南無阿弥陀仏ト知ルベシ。如何トナレバ、口ニ唱ル南無阿弥陀仏が耳ニ入り、一遍ノ念仏ニテハ一念ノ惡ヲ消シ、二遍ノ念仏ニテハ二念ノ惡ヲ消ス。惡念死テ善心生ルナレバ、コレ即チ往生ナリ」とし、「往生ニ三義ヲ立ツル中ニ、一ヲ挙テ云ハ、往ハ猶此ノゴトシ。此ニ生ルナリ」といふ、我が心の中に往生するが故に「不往往ヲ名テ往生トナスナリ」といつている。最後に梅岩は「念仏」について説明しているが、念仏の行者もはじめはこの世を火宅とみ、つねづね厭離したいと思い、極樂往生を願ひ長い年月にわたつて南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と唱えている中に、次第に称名が習慣化され、雑

念が消えて「後ニハ南無阿弥陀仏計ニナレバ、不往シテ南無阿弥陀仏ニ生ルナリ」「南無阿弥陀仏ニナレバ我ト云モノアルベキヤ。我ナケレバ虚空ノ如シ。虚空ニハ南無阿弥陀仏ノ声有テ、唱レバ此南無阿弥陀仏ナリ。阿弥陀仏直ニ御名ヲ唱玉フハ説法ニアラズヤ」とし、この説法の功德によつて、弥陀を念ずる行者も、また念ぜられる阿弥陀も共に一体となつて、苦樂の二つを離れ、無心無念の不可思議の境界に入り、本覺の力に依つて自然に開悟することが出来る。これを自然悟道といふ、念仏宗でいわれる能所不二、機法一体ということであると云う。また彼は、阿弥陀經の中に「……其土有^ソ仏、号^シ阿弥陀、今現在説法」の「現在」を説明して「現在ハ目前ノコトナリ。唯心ノ浄土、己心ノ弥陀ナレバ、娑婆即寂光ナリ」といふ、然レバ現在ノ説法ト云ハ、草木国土悉皆成仏ニテ、森羅万像悉一仏ナレバ、柳ハ緑花ハ紅ト分レテ、己々ガ法ヲ説ナリ。一心不乱ノ修行ヲ以テ此ニ至リ、九品ノ浄土ヲ目前ニ拝ムベシ。コレ即チ諸法実相ナリ。……釈尊ノ法性ヲ悟リ一仏成道シ玉フト、念仏ニテ法性ニ至リ、自然悟道シタルトニツノ替リアリヤ」

以上、彼の言葉を通してその「浄土観」「往生観」「念仏観」について述べてきたが、その解釈は甚だ禪宗的であり、本来浄土教で云う「厭離穢土、欣求浄土」の思想を、このように極めて現世主義的に解釈がなされたことは、梅岩教学自体、現実活動している商人階級の実践倫理を説く必要上、また当然なことで、門弟手島堵庵（一七一八一七八六）にいたると、盤珪禪師のとく「不生の仏心」を自己の教学に導入し、師梅岩以上に心學が仏教化の傾向をたどつていくことになる。

参考文献 柴田実編『石田梅岩全集』日本思想大系『石門心學』